

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 新居 洋子

本論文は、清朝に仕えていたイエズス会士アミオ(Jean-Joseph-Marie Amiot, 1718-1793) がフランス語で記した論説を主な分析対象とし、18 世紀における中国とヨーロッパの思想交流の具体像に迫ろうとしたものである。

第 1 章は、アミオがまとめた『孔子伝』の分析である。アミオは祭天儀礼や祖先祭祀について記述するにあたって、「天」や「上帝」の解釈に関わる 17 世紀以来の典礼論争を強く意識していたことを示した。続く第 2 章では、アミオの中国音楽研究を取り上げる。アミオは中国音楽の背景にある理論に注目し、「普遍科学」と結びつけてそれを理解しようとした。そのようなアミオの探究は、当時のヨーロッパで展開していた新しい科学観と密接な関係があったことを指摘する。第 3 章は、アミオが陰陽の理論に新しい視点を加えたことを論じる。18 世紀末のヨーロッパで流行していたメスメリズムは、「流体」や「動物磁気」といった独特の概念をふくむ医療実践だった。アミオはメスメリズムの理論を利用することで、中国医学における陰陽の気のとらえ方を説明し直し、陰陽理論が自然理解に有用だと説こうとしたのである。

以上のような中国古代文明についての再認識だけでなく、アミオは同時代の清朝の政治と文化についても自らの視点を打ちだした。第 4 章では、清朝皇帝の統治が「公共善」の理念に即したものだとしてアミオが強調していたことの意味を、当時のフランス思潮の文脈のなかで考察した。第 5 章は、アミオが満洲語をヨーロッパに紹介しようとした熱意に注目する。それは、満洲語をフランス語同様に「明晰」なものとする見方に加え、満洲語をひとつの「普遍言語」とみなし「文芸共和国」の理念と結びつけようとする立場に由来していたことを論じた。最後に第 6 章は、アミオの歴史叙述に注目し、中国史について 18 世紀ヨーロッパ人が議論を展開していた状況に即して分析する。特に、聖書にもとづく歴史観との整合性や中国の記録の信憑性が主要な論点となっていたことを指摘した。

本論文は、これまで閑却されていた 18 世紀後半の西学の重要性について正面から論じた力作と評価できる。刊行されたアミオの論説をはじめとして、フランス国立図書館の手稿の調査も行ない、さらにアミオが依拠した中国語および満洲語の文献を特定しつつ分析することで、アミオの関心の所在について詳細に解明した。18 世紀後半に生きたアミオの歴史的立場づけについては、なお不明確な点が残る、いっそう広い視野からの説明を求めたいところではあるが、本論文に示された視点の斬新さと成果の大きさに基づいて、博士(文学)の学位を授与するにふさわしいと判断する。